

第 31 回発展途上国研究奨励賞の表彰について

「発展途上国研究奨励賞」は発展途上国に関する社会科学およびその周辺分野の調査研究水準の向上と研究奨励に資するために、アジア経済研究所が1980年に創設しました。

表彰の対象は、前年1～12月の1年間にわが国で公開された図書、雑誌論文、調査報告、文献目録などで、発展途上国の経済、社会などの諸問題について研究、分析したものとしています。

平成22(2010)年度は各方面から推薦された42点を選考し、最終選考で下記の作品が第31回授賞作に選ばれました。表彰式は7月1日に当研究所において行われました。

〈授賞作〉

『タイの医療福祉制度改革』（御茶の水書房）

かわもり まさと
河森 正人（大阪大学大学院人間科学研究科教授）

〈選考委員〉

委員長：絵所秀紀（法政大学経済学部教授）、**委員**：小島麗逸（大東文化大学名誉教授）、
末廣昭（東京大学社会科学研究所所長）、豊田利久（広島修道大学経済科学部教授）、
脇阪紀行（朝日新聞社論説委員）、白石隆（アジア経済研究所所長）

〈最終選考対象作品〉

最終選考の対象となった作品は授賞作のほか、次の3点でした。

岡部恭宜著『通貨金融危機の歴史的起源——韓国、タイ、メキシコにおける金融システムの経路依存性——』（木鐸社）

柿崎一郎著『鉄道と道路の政治経済学——タイの交通政策と商品流通 1935～1975年——』（京都大学学術出版会）

倉田徹著『中国返還後の香港——「小さな冷戦」と一国二制度の展開——』（名古屋大学出版会）

河森正人『タイの医療福祉制度改革』

えしよひで き
絵 所 秀 紀

本受賞作は、「排除された多数者のための社会保障」という問題設定のもとで、タイの「30パーツ医療制度」形成のプロセス、推進力、制度の構造などを明らかにしたものである。従来ほとんど研究の光があたっていなかった分野にメスを入れたという意味で、きわめて新鮮な研究成果である。特に「農村医師官僚」(モー・チョンナボット)に着目し、「人」に焦点をあてて保健省内での2つの思想の対立を丹念に追った点は出色である。この作業によって、従来タックシン首相とその側近やタイラックタイ党による集票のためのポピュリスティックな政策として理解されがちであった30パーツ医療制度形成の全貌が明らかになった。

本書のもうひとつの貢献は、社会保障研究と地域研究を統合した点にある。近年東アジア諸国の社会保障制度については、欧米との比較のもとで「東アジア福祉資本主義」・「東アジア福祉システム」の特徴に関する議論が展開されている。しかし、これらの福祉に関する研究は、社会学(社会政策、社会保障制度)の立場に立つかあるいは政治学(民主化と福祉レジーム論)の立場に立つかの相違はあるものの、残念ながら地域研究の成果はほとんど参照されていない。これに対し河森氏はこれまでタイの民主化運動

や東北タイ小農の請願活動についての実証研究を進め、そのなかでタイの官僚制度や地方における住民組織の活動に対する理解を深めてきた。本作品は、こうした地道な研鑽が「30パーツ医療制度」というテーマのもとで花開いたもので、河森氏ご本人にとって新しい研究の境地を切り開いたという点も高く評価された。

研究の手法も手堅いものである。「30パーツ医療制度」の発想の原型を提出した農村医師官僚のリーダーの一人であるサグアン・ニッタヤーランボンによる詳細な報告書だけでなく、現地の新聞・資料を丁寧にフォローし、また多数の関係者からのヒアリングを重ねることによって情報を確認している点も地域研究としての貴重な研究成果のひとつである。

しかし筆者も認めているように、本研究は「30パーツ医療制度」の「制度設計」に関するもので、受け手である住民側の反応に触れていない。また「30パーツ医療制度」で供給される医療サービスの質についての議論も見当たらない。選考委員会では、今後こうした諸点もフィールド調査によって明らかにしてほしい、と期待する声があった。

(法政大学経済学部教授)

●受賞のことば——^{かわもり まさと}河森 正人

アジア経済研究所から、第31回発展途上国研究奨励賞を授賞するとの連絡をいただいた時、嬉しさのなかにも名誉を感じたのは当然のことなのですが、現在の心境としてはむしろ、もっとしっかりやるように、と発破をかけていただいたという感じのほうが強いように思います。

これまで、地域研究にこだわりつつも、タイの事例の背後に他の東南アジアの国々のことや日本のことが透けてみえるような研究を目指したいと思ってきました。すなわち、タイの歴史性・固有性に根ざしつつも、ディシプリン（社会福祉学や社会保障論）と実践（課題解決）の双方の面で、比較の視点と普遍性を追及しようと心がけてきました。

本書は、タイの「30 パーツ医療制度」という「制度」の形成過程を跡付けたものであり、こうした歴史分析は地域研究の得意とするところですが、他方、これを単なる一国研究に終わらせたくないという思いもありました。手探りのなかで既存研究を参照したのですが、近代雇用部門の被雇用者向けを前提とした、韓国や台湾など（狭義の）東アジアを対象とする既存の社会保障研究は、農民の近代雇用部門への吸収が依然として低位な東南アジア諸国のそれを考える上で、必ずしも適当な準拠枠ではありませんでした。そこで出会ったのが、「排除された多数者」のための社会保障という考え方でした。この点に関連して、今後、東南アジアの場合は農村人口が相当程度残った段階で高齢化が進行すると考えられ、よって（狭義の）東アジア型とは異なるケアのシステムを考えていく必要があるのではないかと考えています。

さて、「あとがき」の部分で書きましたように、本書は「30 パーツ医療制度」研究の前段部分、すなわち国家が作った「制度」や「外形標準」について述べたものであり、後段部分、すなわち「主体」ないし住民の側での受容やアレンジや抵抗については、今後の研究課題として残されていることとなります。この後段部分についての考察を進めるにあたっては、コミュニティ内の高齢者ケアの現場が主たるフィールドとなります。

こうした今後の研究課題を追及していくなかで、21世紀におけるコミュニティというもののあり方の一端を探ってみたいと考えています。さらに、「私の古い」と「あなたの古い」を繋げて考えるとともに、「あなたの古い」のなかに私が学ぶ、という姿勢にこだわっていきたいと思っています。

略歴

1959年富山県生まれ。大阪市立大学大学院創造都市研究科博士後期課程修了。博士（創造都市）。アジア経済研究所研究員、タマサート大学タイ研究所客員研究員、在タイ日本国大使館専門調査員、チュラーロンコーン大学経済学部客員研究員、大阪外国語大学外国語学部助教授、同教授を経て、現在、大阪大学大学院人間科学研究科グローバル人間学系教授。

主要著作

『タイ——変容する民主主義のかたち——』アジア経済研究所（1997年）ほか。